

《キャラクター紹介》

【魔女】

異世界転生した魔女。魔法チートを授かったので、大体の魔法は使える。

転生したら、股間にブツが付いてたけど、同人誌で履修済みだったので、すんなり適応した。性欲が強く、毎晩のように使い魔を抱きつぶしている。

毎日使っている魔法は布類を洗浄する魔法。もちろん情事後のお片付け用である。

自作の回復ポーションを売りつつ、森にある洋館でスローライフをおくっている。

【獣人(男)】

ケモ耳と尻尾の生えた犬系の獣人。魔女の使い魔で首輪を付けている。

元は盗賊や遺跡荒らしなどをするごろつきだったが、魔女の洋館に忍び込んだ際、魔女のふたなりちんぽによる、お仕置き屈服さセックスで快樂堕ちし、紆余曲折を経て使い魔になった。

普段はツンツンして生意気だが、魔女に犬耳を撫でられると別人のようにデレデレになってしまう。自分のことを初めて優しくなでてくれた魔女が好き。しかし、素直になれず反抗的な態度をとってしまうのが悩み。

「ったく…… 毎日毎日、よく飽きないな……」

自分の使い魔を押し倒した瞬間、この言葉である。いくら彼がツンデレだと分かっているとはいえ、情事の度にツンツンされると涙が出そうだ。まあ、今更私の熱棒がへこたれることはないけど。彼の塩対応はいつものことだ。不満げに拗ねてみせる彼をきゃんきゃん喘がせるのがいいのだ。

しかし、最終的にはデレてくるとはいえ、連日のようにツンツンとした態度を取られると、甘やかすだけでなくイジメたくなる。

……たまには趣向を変えてみようか。

生まれたままの姿に首輪だけをつけた彼の素肌を、つつーと撫でる。

「んっ…… ♡」

私の企みに気づかず、這い回る指の感触を享受する彼。さっきまであんな不満そうだったのに、もう期待した瞳でこちらを見る。

首輪の下の皮膚を指先でなぞり、その指をさらに下の方にずらしていく。まあく色づく胸の飾りを掠めるよう

に刺激すると、彼の胸の先端はぷっくりと膨らんだ。そのまま、主張し始めた先っぽを両方一緒に可愛がる。

不規則に跳ねる彼の身体を逃さぬように、注意深く指先を動かし、愛らしい双芽を責め立てる。指の腹を使ってすりすりとは撫で回し、爪先でカリカリと引っ搔き、ときにはデコピンの要領で弾く。

弾いた瞬間、「や、あんっ♡」と彼の喉奥から思わず、といったように甲高い嬌声が漏れた。

彼の顔に目をやると頬を紅潮させ、息を乱していた。自身の痴態を誤魔化すように、彼は憎まれ口を叩く。

「男の乳首なんて弄って……何が楽しいんだ。まったく、これだから変態は……〜〜っ、まっ、ああっ♡」

生意気なことばかり言うその口に、甘い声が混ざり始める。快楽に弱いくせに無駄吠えばかりする、このギャップが堪らない。

指でいじくり回していた胸の先端を咥えて舌で転がす。

「ひうっ♡な、舐めるな、ばか、赤ん坊じゃ、あっ♡あるまい、し……っ♡き、きもちわるい、だろ……っ♡」

「ふおんなにひもちよさそうふあのに？」

「ひああっ♡あ、あん♡そん、な、とこ、で……しゃべ、
るなっ♡っ、あっ、ああっ♡」

彼の胸に顔を埋め、舌で愛撫を続ける。舌先でつつん♡とつついてみたり、舌のざらざらしている部分で舐めてみたりすると、次第に彼の嬌声が大きくなっていく。密着しているからか彼の震えがダイレクトに伝わってきた。

ふーっ、ふーっ、と息を荒げながら、彼は涙を滲ませた目でキッと睨みつける。……唾液でテカリ、鮮やかに色づいた小さな赤い果実をふるふると揺らしながら。

「う……♡お前の唾で汚れたじゃないか……どうすんだよ……」

「ええー…… ごめんごめん、今綺麗にしてあげる」

毎晩もっと汚れることしてるのに、と思いながらも、形だけの謝罪をする。そして、水魔法を発動させ、指先にちいさな水球を作り出した。その水球を胸の先端に撫でるようにあてて、汚れた部分を軽く清める。

「…… ん♡」

ひんやりとした感触に、彼はうっとりと目を細め、小さく身をよじった。

でも、水洗いだけだと皮膚が荒れてしまうかもしれない。乳首の皮膚は敏感だと言うし.....。

そうだ、と私は空間転移の術で保湿用のオイルを取り寄せる。

このオイルは私自身が調合したものだ。赤ちゃんの肌にも使えるくらい刺激が少なく、それでいて香りが良いという優れたものだ。応用の利くレシピのため、さまざまな香りのラインナップを作っている。

これは私自身が調合した特製のオイルだ。赤ちゃんの肌にも使えるほど刺激が少なく、それでいて、ほのかに心地よい香りをしている。応用の利く配合ゆえ、香りの種類も豊富に揃えている。

その中でも、一部の客層からとりわけ人気を集めているのが、催淫効果を持つ花を調合したものだった。夜の営みに刺激を求める貴族や、初々しい恋人を怯えさせたくないと思う男たちが、こっそりと買い求めていく人気商品である。

といっても、媚薬のような劇的な効き目があるわけではない。

せいぜい「なんかムラムラしてきたかも……」と思わせる程度の効力しかない。

オイルを手のひらに広げると、ふわりと甘やかな花の香りが立ちのぼる。

オイル塗れの手で彼の両胸の先端をぬちゅ♡とつまむ。そのまま指の腹で優しく撫で、円を描くようにゆっくりと馴染ませていく。くちっ、くちゅっと粘度のある水音を立てながら、艶めく先端へ丁寧にオイルを塗り込んでいった。

「んっ♡……っ、く……は、あ♡へ、へんなもん、そんな、とこ、に、塗るなっ、あ♡……んっ♡」

「ええー、ちゃんと保湿しないと、荒れちゃうわよ……じゃあ、『自分で塗って』」

声に魔力を乗せ、不満げに睨む彼へ命令を下す。どれだけ生意気な態度を取ろうとも、彼は私の使い魔だ。魔力を込めた命令には逆らえない。

「なっ……！それは卑怯じゃ、あ♡っああ♡ひう、ん♡と、止めろ、っ、ああ♡」

抗議の声を上げた瞬間、彼の指先は命令に従って動き出した。粘度を帯びたオイルがぬめる音を立てる中、彼の両手は自らの胸元へと伸びていく。彼の意思に反して、敏感な先端を摘み上げ、私がしてみせた通り、ゆっくりと、執拗に撫で回していった。

ぬちゅ、くちゅ♡と粘度の高い水音を立てて、彼は自身の乳首にオイルを塗り込んでいく。

オイルに濡れて光るソコを、命じられるがままにこねくり回してしまう彼の姿は、強制されているとは思えないほど挑発的だった。

「上手上手。えらいえらい♡」

「て、テキトーなこと、言うなあっ、ああっ♡ん♡いいから、やめっ、〜っ♡」

褒められると反応してしまうのは、犬系獣人の性なのだろうか。それとも単に、彼自身の気質なのか。不機嫌そうに眉を寄せながらも、その尻尾は正直にぱたぱたと揺れていた。

「ちゃんとぬりぬりできてえらいね。『乳首いじめて♡』っておねだりしてるみたい」

「し、してない♡お、まえが、やらせたんだろっ、んん♡あう、くう、ん♡」

からかうようにニマニマと笑って褒めてやれば、彼からの風当たりはますます強くなる。けれど、胸を弄りながら必死に睨みつけてくる姿など、子犬の威嚇よりも愛らしい。

乳首オナニーに夢中な彼の脚を割る。

「なっ、やめっ！」

彼の制する言葉とは裏腹に、股間はぬるぬるした液体でいやらしく濡れていた。

ぴょこんと主張する先端からは雫が滲み、奥の窄まりからは仕込まれていたローションがとろりと零れている。

彼は男の身ではあるから、私の逸物を受け入れるにはそれなりの準備が必要だ。

使い魔になったばかりの頃、その準備は私の使役したスライムでおこなっていた。

けれど最近では、彼のほうであらかじめ準備してくれていることが多い。

今日もまた、口では文句を言いながら、きちんと私を迎え入れる支度を済ませているらしい。

小さく収縮を繰り返す後孔がローションで濡れているのを見て、彼への愛しさがこみあがった。

「おしり、ちゃんと用意してくれたんだ」

「う、うるさい！」

胸元では、くりゅ、くちゅっ♡と粘つく音が続いている。彼は気まずそうに視線を逸らしながらも、命令に逆らえず、自らの胸を弄り続けていた。

けれど、今日は最後までするつもりはない。彼が強請るまで、挿入するのは指だけにする予定だ。

いつも素っ気ない態度ばかり取る彼を、少し困らせてみたい。

できることなら、自分から欲しがるところを見てみたい。

そんな意地の悪いことを考えながら、私はオイルの残った指先を彼の奥へそっと沿わせる。

オイルとローションが混ざり合い、くちゅ、くちゅ……

♡と湿った水音が静かに響いた。

「あっ、ああっ♡そん、な、とこ、やめっ♡」

幾度も快楽を刻み込まれてきた彼のナカは、差し入れた指を驚くほど素直に受け入れた。

命令の効果が続いている彼は、自らの胸を愛撫しながら腰を揺らしている。

一本、二本とゆっくり指を増やし、内側を優しく掻き混ぜるたび、ぐちゅっ、ぐちゅ♡と卑猥な音が寝室に響いた。

コリコリとした前立腺の裏側を指先で丁寧に撫で上げれば、彼の身体はびくりと大きく震えた。

命令に縛られたまま、彼は上を自らの手で慰め、下は私の指でじわじわと責め立てられている。

快楽に翻弄されるその姿は、あまりにも無防備だった。

「このっ……♡男を抱いて、なにが楽しいんだっ……♡
変態魔女っ♡」

涙を滲ませた瞳には、抗議だけではない熱が混じってい

る。

拒みきれない期待が透けて見えて、思わず口元が緩んだ。

いつもなら、ぐずぐずに蕩けたソコに煮えたぎる欲をぶつけまくるのだが……。

「安心して…… 今日はおちんちん挿れないから」

「へ…… な、なんで……」

快楽に潤んだ瞳を瞬かせ、彼はぽかんと口を開ける。

涙で濡れた睫毛、だらしなく緩んだ唇。

呆気にとられたその顔は妙に幼く見えて、庇護欲をくすぐってくる。……いじめたくなるような嗜虐心も、抱き潰したくなるような欲も、ますます煽られてしまうのだけれど。

「ほ、本気かよ……。いつも、挿れる、くせに……。なんで、どうして……。っ♡あっ、ん♡」

「んー？ 毎日いっぱい無理させちゃってるし、今日はゆっくり休ませてあげようかなって思っただけ」

困惑する彼をよそに、私はわざとらしく音を立てなが

ら、奥に差し込んだ指を掻き回してやる。

すると彼は戸惑ったように眉を寄せながらも、身体だけは正直に反応して、甘く掠れた声を漏らした。

「おい…… なあ、いつまで、その…… そうしてるつもり、なんだよ……」

彼は期待を滲ませた視線を向けながらも、肝心な言葉だけは頑なに口にしない。ここまで意地を張られると、こちらもつい悪戯心を刺激されてしまう。

「…… あなたが『欲しい♡』っておねだりしてくれるなら、いつもみたいに、たーっくさんえっちなことしちゃうのになー」

ふわふわとした獣耳へ唇を寄せ、吐息混じりに囁けば、彼の肩がぴくりと震える。

「だ、誰がそんなこと……♡」

意地を張る声音は強気でも、揺れる耳と熱を帯びた表情が隠しきれていない。

「ふーん…… じゃ、今日は指だけでたくさん弄ってあげるね。お尻、こっちに突き出してね♡乳首イジメるのや

めていいから」

「へ……？」

私は彼に、体勢を変えるよう命じた。

命令に逆らえない彼は、ぎこちなく身体を動かしている。

胸を慰めていた両腕を下ろさせ、そのまま四つん這いの姿勢へ。

ぴんと立った犬耳と揺れる尻尾のせいで、本当に従順な犬のように見えてしまう。

惜しいのは、その表情を正面から眺められないことだろうか。

そう、私の目の前にあるのは彼の顔ではなく、熱を帯びた下半身の方だ。つまり、彼を上にしたシックスナインの体位になっているのだ。

「こ、こんなの……俺が見せつけてみたいじゃねえかっ……♡」

羞恥に顔を赤くしても、命令の拘束がある以上、彼にできる動きは限られている。

せいぜい、突き出した腰を落ち着きなく揺らし、興奮を隠しきれない犬のように尻尾をぱたぱた振るくらいだ。

まあ、シックスナインというところは彼の顔の位置にも私の股間、ぶっちゃけいうと布越しに主張しまくるふたなりちんぽがあるわけで。

快楽で意識が朦朧としているとはいえ、嗅覚の鋭い彼が私の欲情した匂いに気づかないわけがない。

「おまえのちんぽ、こんなになってるのにな♡なんで、どうして、いつもみたいにハメないのかよ……♡い、いや、別にしてほしいわけじゃないけど、お前がどうしてもって言うなら……♡」

「だーかーらー、あなたがおねだりしてくれたら、ハメるってば。あなたのおねだり、聞きたいなー」

「そっ、そんな恥ずかしいことできるかっ」

はーっ♡はーっ♡と彼は荒く乱れた呼吸を繰り返しながら、目の前の布越しのふたなりちんぽにスリスリと顔を擦りつけてくる。時折、彼の口から垂れた涎がポタポタと股間部位の布を汚すのが感じられた。

彼が羞恥と欲求のあいだで揺れているのが、手に取るよ

うに分かった。

正直、今すぐにでも衣服を脱いで、目の前でヒクついている後孔をプチ犯したい。

けれど、ここで欲望に身を委ねてしまっでは、「おねだりしたら挿入する」といった私の発言が軽んじられることになる。使い魔の主として、従者が混乱しないよう、言動と行動には一貫性を持たせたい。

故に、彼への挿入は我慢することにする。

幸いなことに、ふたなりとして生きて来た中で、誤射を防ぐ術は習得していた。今すぐにでもぶち犯したい衝動をぐっところえて、彼の尻穴を責め立てることに集中する。

指を動かす度に、ぐちゅぐちゅ♡とローションとオイルが音を立てて泡立つ。

「んっ……♡お前が、ムラムラしてる匂い、嗅がせながら、おしりいじるのやめろよ、毎日……俺のナカにザーメンぶちまけるくせに、なんで、どうして……～っ♡」

無意識なのか、彼がすんすん♡と股間に顔を擦りつけてくるので、堪えるのが大変だ。

気を紛らわすように、指の動きを速める。

毎夜私の剛物を受け入れている彼の内壁は切なげに蠢き、指をしゃぶっている。

彼の前側からは先走りがポタポタと溢れていた。

前立腺の裏側を探り当て、優しくさすってやると、脚をガクガク震わせながら、背中を弓なりに反らした。どうやら、達したようだ。

「いつも、ちんぽで、イジメるくせに、なんでゆびだけ、……っ、あ、あああっ♡イっ、いった、からあ♡ゆび、やめろよお……♡」

やめろと言いながらも、彼の内側は名残惜しむようにきゅう♡と指先へ絡みついてくる。無意識なのか、彼の腰もへこへこ♡と妖しく揺れていて、もっと奥を触れてほしいと身体じゅうで訴えかけているようだった。

こんなにも身体は正直なのに、肝心の言葉だけは頑なに飲み込んだままだ。

どうやら、もっと焦らされたいらしい。

そう結論づけた私は、小さく笑みを零しながら、手のひらへ新しくオイルを垂らした。とろりとした液体が指のあいだを滑り落ち、甘い花の香りがふたたびふわりと広がっていった。

※

「ば、か…… あ♡」

いったい、何度イかせた頃だろう。

気づけば彼はすっかり力尽きた様子で、浅い寝息を立てながら眠りに落ちていた。

しまった、と私は小さく眉を寄せる。

このオイルには催淫作用だけでなく、安眠効果も若干含まれている。どうやら今回は、そちらが強く働いてしまったらしい。嗅覚の鋭い獣人と人間とでは、いろいろと効き方に違いがあるのかもしれない。要検討だ。

念のため鑑定魔法を使い、彼の身体に異常がないか確かめる。

……うん、大丈夫そうだ。

安堵の息を吐きながらも、私は自分の内側に残った熱へ

意識を向ける。股間では未だ鎮まりきらない欲がじくじくと疼いていた。仕方なく、私は股間で荒ぶる猛りを鎮めるため、オナホ（材質：スライム）を手を取った。